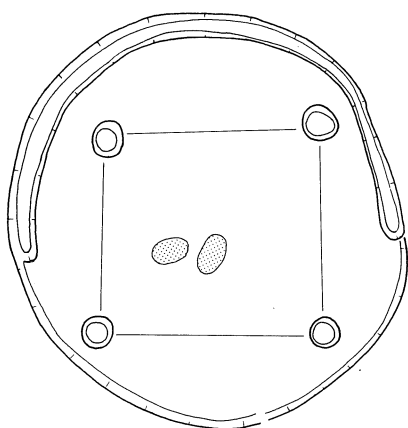


つる 鶴 松 まつ 遺 跡 V

(株式会社ジュピタ住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書)



1 9 9 2

袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成3年度に袋井市教育委員会が実施した、株式会社ジュピタ住宅建設に伴う鶴松遺跡の第5次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査、本書刊行に係る事務については、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が行った。
4. 本書の編集、執筆、挿図、図版、写真撮影の作成は松井が行った。
5. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 本書の作成にあたっては下記の方々に御教示、資料の提供を賜り、記して感謝の意を示します。(敬称略)

岡本茂史 塚本和弘 篠原修二 柴田 稔 寒川 旭

凡 例

本書で用いた遺構の記号は以下のとおりである。

S H = 竪穴住居跡 S I = 竪穴状遺構 S B = 掘立柱建物 S K = 土坑 P = 小穴

目 次

1 調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過・調査整理体制	1
i) 調査の経過 ii) 調査整理体制	
3 周辺遺跡の動向	3
4 基本層位・液状化現象	4
5 遺 構	4
i) 竪穴住居 ii) 掘立柱建物 iii) その他の遺構	
6 遺 物	10
i) 弥生時代中期の遺物 ii) 弥生時代後期の遺物	
7 考 察 —中遠地域における竪穴住居の編年の様相—	13

挿 図 目 次

第1図	発掘調査地点図	2
第2図	遺跡の周辺地形図	2
第3図	発掘調査区配置図	3
第4図	発掘調査区全体図	5
第5図	SH1・2・10・12実測図	6
第6図	SH3～5・7～9実測図	7
第7図	SH6・11、SB1実測図	8
第8図	SB2～4実測図	9
第9図	SI1実測図	10
第10図	遺物実測図1	12
第11図	遺物実測図2	13
第12図	住居跡切り合い関係図	14
第13図	鶴松遺跡第1次・第3次発掘調査区実測図	15
第14図	中遠地域竪穴住居跡編年図	18

図 版 目 次

図版1	1. 発掘区全景(西より) 2. SH1(北西より)
図版2	1. SH2～8(重複が多い西より) 2. SH3炉跡(西より)
図版3	1. SH10～12(西より) 2. SB4(西より)
図版4	1. 噴砂検出状況(南より) 2. 出土遺物

鶴松遺跡第5次発掘調査報告

1 調査に至る経過

株式会社ジュピタが鶴松遺跡内において住宅建築を計画し、袋井市教育委員会に相談に見えられたのは平成2年もおしつまった12月のことであった。袋井市教育委員会は建築予定地について早速検討したところ、鶴松遺跡の過去の調査において遺跡の所在が明らかな地点であることが判明したため、平成3年度に発掘調査を実施することが可能であるか検討をした。平成3年度についてはすでに発掘調査の事業が決定していたものの、発掘調査面積が少ないことと1～2戸の住宅建築ということもあり平成3年度発掘調査が予定よりも早く終わった事業がでた場合にかぎり、早期に本調査を組み込み実施することにした。

平成3年度にはいり幸いなことに早期に終了する見込のある発掘調査がでたため、株式会社ジュピタと袋井市教育委員会は早速発掘調査の計画を検討し、平成3年8月～9月に発掘調査を実施することとした。

2 発掘調査の経過・調査整理体制

i) 調査の経過

平成3年8月19日～8月23日

効率良く調査するためバックホーにより表土の除去を行った。これと並行して作業員による遺構確認を行った。遺構検出面は砂礫層でかなり強く締まっていたため調査に手間取る可能性が出てきた。この頃雨天が続きほとんど調査がはかどらない状況であった。

8月26日～9月10日

遺構は弥生時代後期を中心とした竪穴住居跡が多数切り合い、検出面では溝状遺構に見えるほどであった。また、天候も悪く隣接の水田に水を引き入れる時期でもあったため発掘区がたびたび水没し水の排出に苦労した。また、それ以上に砂礫混じりの土の人力での掘削は予想以上に作業員の作業能率を低下させた。

9月11日～9月13日

かなりきつい調査であったが面積が少ないことが幸いし、おおむね調査が終了に近づいたので、写真撮影を行った後に遺構の実測にとりかかりすべての調査を完了した。

ii) 調査整理体制

調査実施機関 静岡県袋井市教育委員会

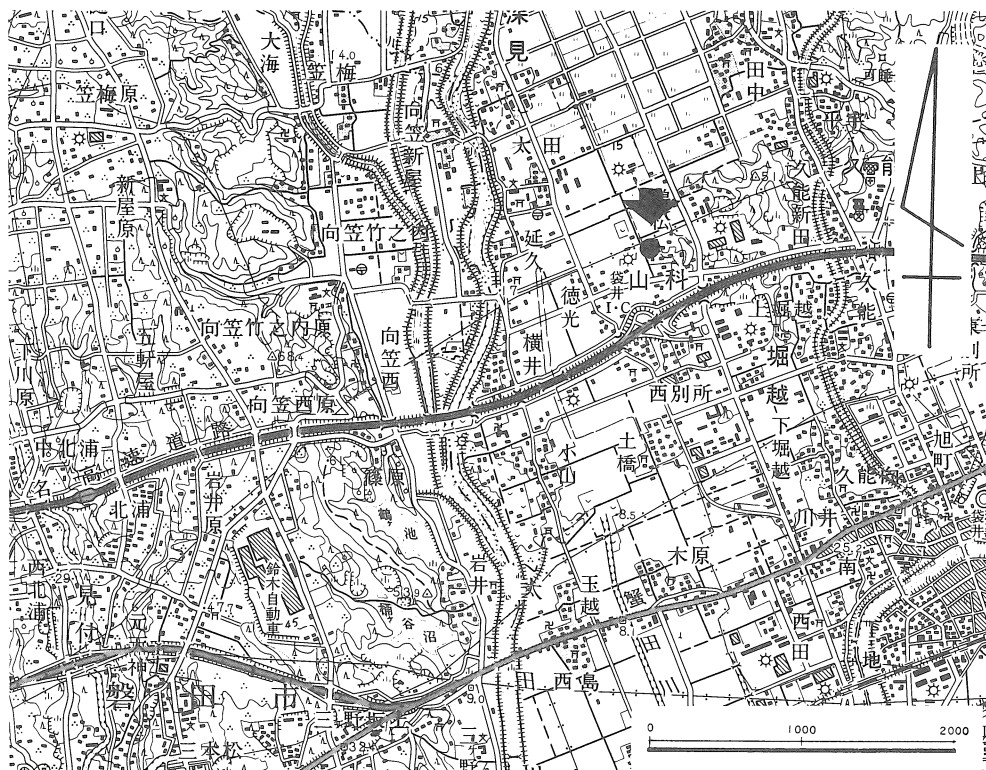
教育長 浅井通男 社会教育課長 岩崎 保 文化振興係長 小粥保夫

文化振興係 吉岡伸夫 建部千代子 永井義博 加藤理文 松井一明（調査担当者）

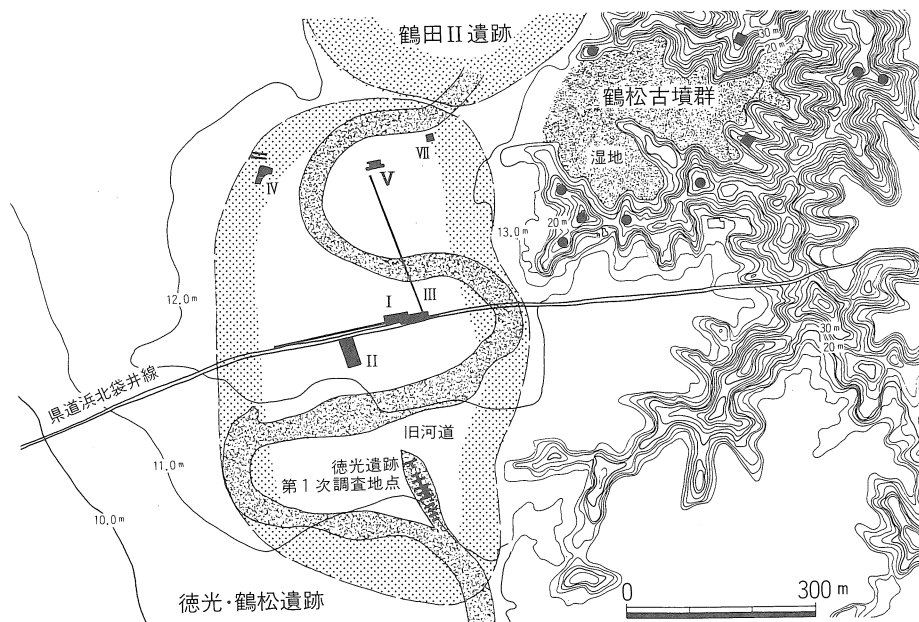
白沢 崇 森井雅彦

調査参加者 加藤博司 中州栄吉 三浦久雄 安間しげ子 永田のぶ江

早川里美 山本はつ江



第1図 発掘調査地点図



第2図 遺跡の周辺地形図

3 周辺遺跡の動向

今回の調査で判明したのはすべて弥生時代後期を中心とした遺構、遺物であるので、今までの調査でわかってきた弥生時代の周辺遺跡の動向について少し述べてみたい。

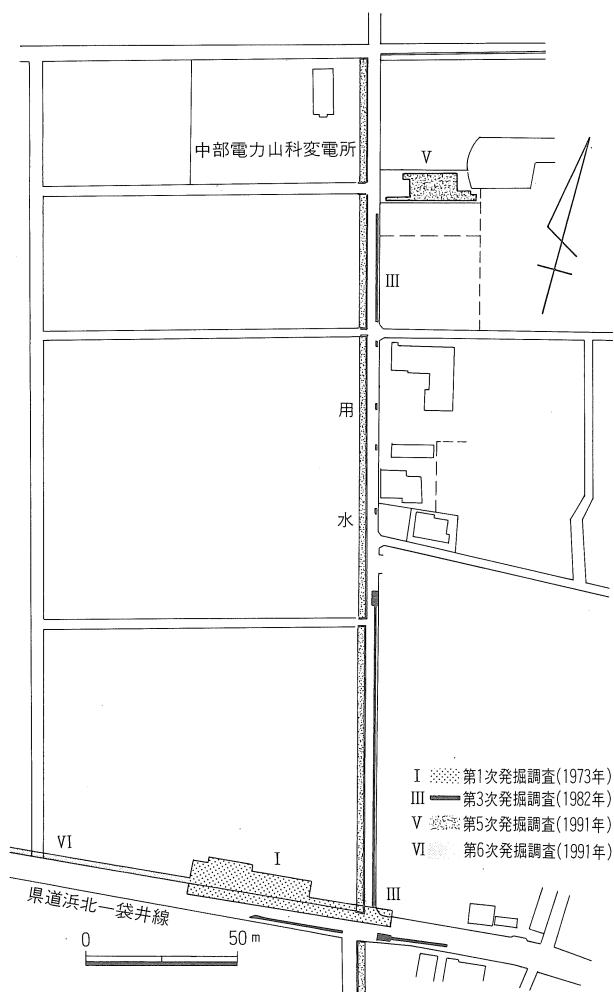
弥生時代の太田川中流域の遺跡群の動向についてはすでに述べたことがある。それらを参考にすると袋井市域の弥生時代の有力な遺跡群は太田川水系の鶴松遺跡・土橋遺跡を中心とする遺跡群、掛の上遺跡・大門遺跡を中心とする遺跡群、原野谷川水系の領家遺跡・山下遺跡等を中心とする遺跡群があげられる。これらの遺跡の共通の要素は水田地として耕作可能な中規模河川のつくる自然堤防近くの低地が広く隣接し、居住域として可能な自然堤防や河岸段丘が比

較的に広く取れる地理的条件と、各遺跡群間の距離が適度に離れているという政治的条件から遺跡群の立地が図られていると考えられる。

これらの有力な遺跡群はいずれも中期中葉に集落が開始し、後期に至ると周辺部に衛星状に集落が拡大する。また中期中葉から始まる大規模な方形周溝墓群を隣接地に持つ傾向も指摘できる。

鶴松遺跡が所属する遺跡群では近年鶴田Ⅱ遺跡（袋井市教育委員会 1991）や堀越ジョウヤマ遺跡（袋井市教育委員会 1991）が調査され、遺跡群の拡大傾向が中期後葉から認められ、後期後半古段階に集落群の拡大がピークになることが判明してきている。こうした傾向はおそらく他の有力遺跡群も同様な傾向として捉えられるようになるかと予想している。

環濠集落の動向も部分調査ではっきりしたことがいえる段階ではないが、鶴松遺跡の後期前半、堀越ジョウヤマ遺跡の後期前半～後半古段階の溝状遺構が環濠として良いなら、



第3図 発掘調査区配置図

後期前半、後期後半古段階に環濠の必要性があったと推測される。後期前半の環濠集落の成立要因は畿内をも含んだ弥生時代後期社会成立による集落群間の緊張関係、後期後半の環濠集落成立の要因は各地域の遺跡群の集落規模の拡大による遺跡群間の緊張状態と畿内からの何らかの政治的な圧力によるものと推察した（松井 1988）が、詳しくは紙面の関係でここでは述べていない。いずれにしても、鶴松遺跡の周辺は南関東～東海地方の弥生時代の動向を知るうえできわめて興味深い地域であることは明らかである。

4 基本層位・液状化現象

第5次調査では住居跡が比較的多く切り合っていたため住居跡付近に基本的な層位の堆積が良好に残り、調査区南側（第5図参照）の基本層位を整理すると以下のとおりとなる。

- I 層 褐色土層 表土 現水田耕作土。
- II 層 黒色粘土層 平安時代後半～中世の遺物の包含層と思われる。
- III 層 黒褐色土層 砂礫混じり、弥生時代後期前半～後半の遺物の包含層である。
- IV 層 砂礫層 強く締まった層で、弥生時代後期遺構基盤層である。

今回の調査で注目されるのは、地震により起こる液状化現象（噴砂）が観察されたことである。液状化現象はすでに市内坂尻遺跡で7世紀末と4世紀後半のものが発見され、過去の自然環境を知るばかりでなく、遺跡間の時間的な同時性を証明する貴重な現象として注目されている。今回の調査では、住居跡の切り合いが多い場所のほぼ中央にそって噴砂現象が見られた。時期はIII層を切るもの（第5図参照）とIII層に切られるものがあり前者は弥生時代以降、後者は弥生時代後期後半以前のものと推定でき、後者は今のところ静岡県内では最古の噴砂現象となる可能性があり、寒川旭氏により進められてきている歴史的な東海地震と西南海地震との対比研究（寒川 1990）に一石を投じる資料となろう。

5 遺 構

第5次調査で検出された遺構は、弥生時代後期を中心とする竪穴住居や掘立柱建物などであり、その他の時期については検出されなかった。

i) 竪穴住居跡（SH）

竪穴住居跡は合計12棟検出できた。プランが推定できるものはその内11棟で、やや隅丸の方形プランをなすSH1・2・4～6・11と、円形プランのSH3・7・8・10・12に別れそうである。切り合い関係から方形住居から円形住居になるようである。

いずれの住居跡も4本の支柱穴を持ち、壁溝が巡らされている。炉跡は焼土が還元状態で白色粘土化していたので検出が難しかったがSH3で地床炉が見つかった。炉の位置は住居のほぼ中央にある。なお、SH6は一部の調査であったが、所謂大形住居であり位置をづらすことなく建て替えを3回行っており、本調査地点での中心的な竪穴住居跡になると考えられる。

各住居の時期は出土遺物が少ないので決定し難い面もあるが、出土遺物と切り合い関係から方形プランの住居は後期前半、円形プランの住居は後期後半古段階に属すると考えられる。

ii) 掘立柱建物 (SB)

掘立柱建物は今回の調査では4棟検出することができた。形式はSB1・4の1間×2間、SB2・3の1間×1間が認められた。

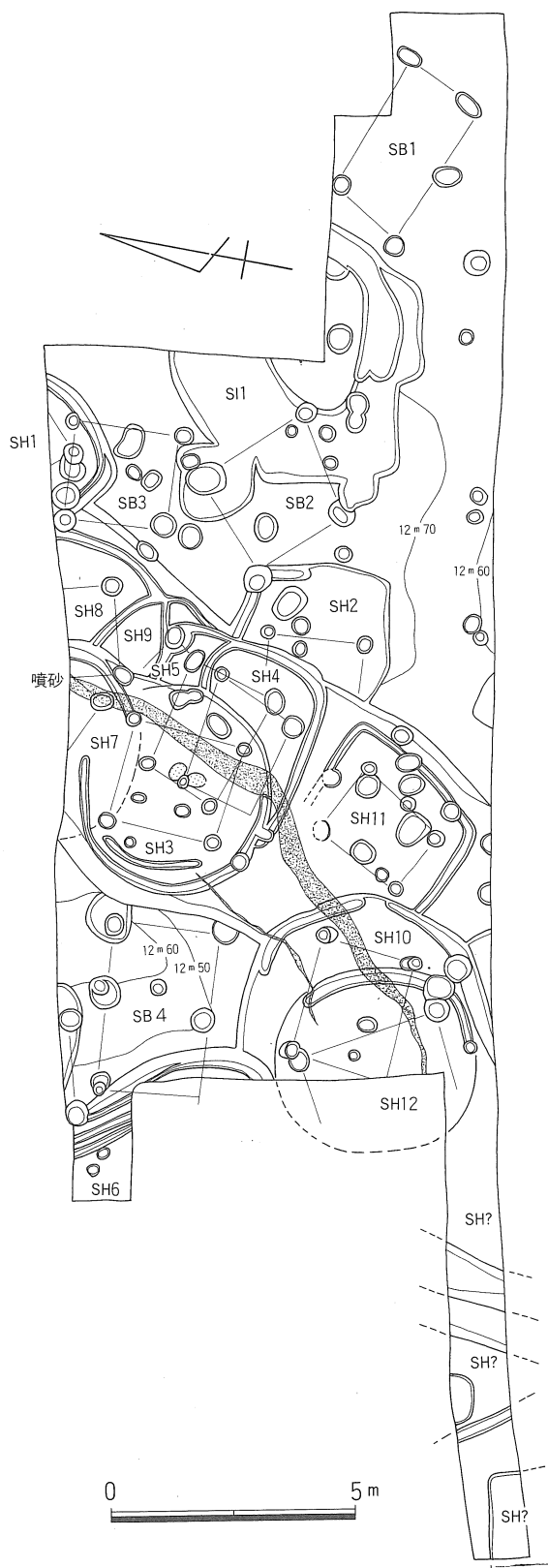
SB1は梁間1に対し桁行2の比率、SB4は同様に1:1.7の比率となり弥生時代のなかの掘立柱建物としては長方形になるものである。SB1は柱ならば悪く平地式の住居、SB4についてはやや長方形気味であるが柱ならば良く各柱穴も深く掘っていることから高床倉庫と推定しておきたい(袋井市教育委員会 1983)。

SB2の建物規模は2.5m、SB3は2mを測る。SB2は静岡県内では一般的な規模であるが、SB3についてはやや小型で竪穴住居の柱穴ならばかもしれないが、竪穴住居の柱穴と比べるといずれも柱穴の掘り方は大きく本報告では掘立柱建物として扱っておきたい。

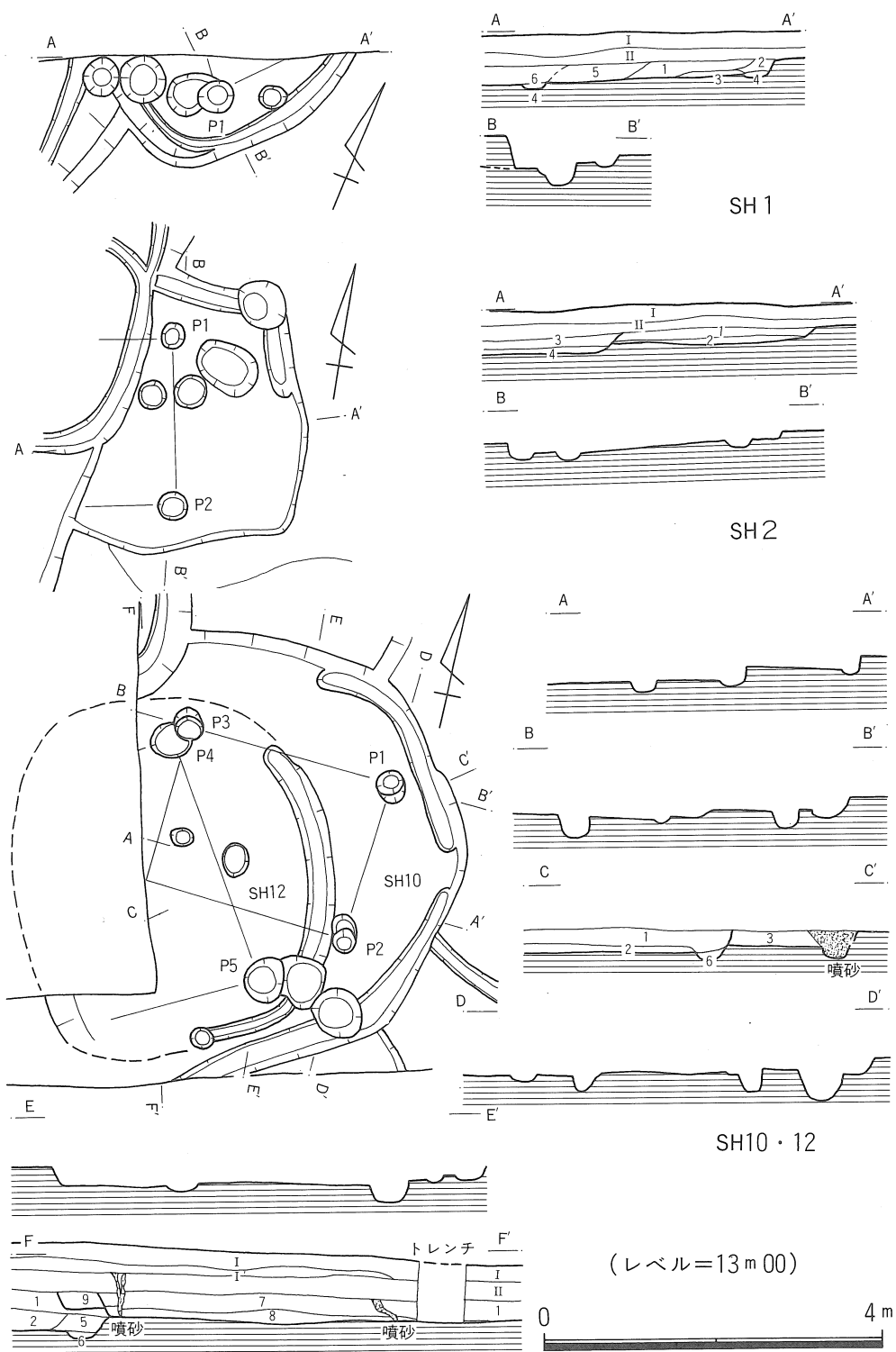
各掘立柱建物の時期については、竪穴住居との切り合い関係が不明なうえ柱穴出土の土器もほとんど小破片で不明といわざるをえないが、比較的竪穴住居を避けて建てられているため竪穴住居とほぼ同時期の後期前半～後期後半古段階と考えておきたい。

iii) その他の遺構

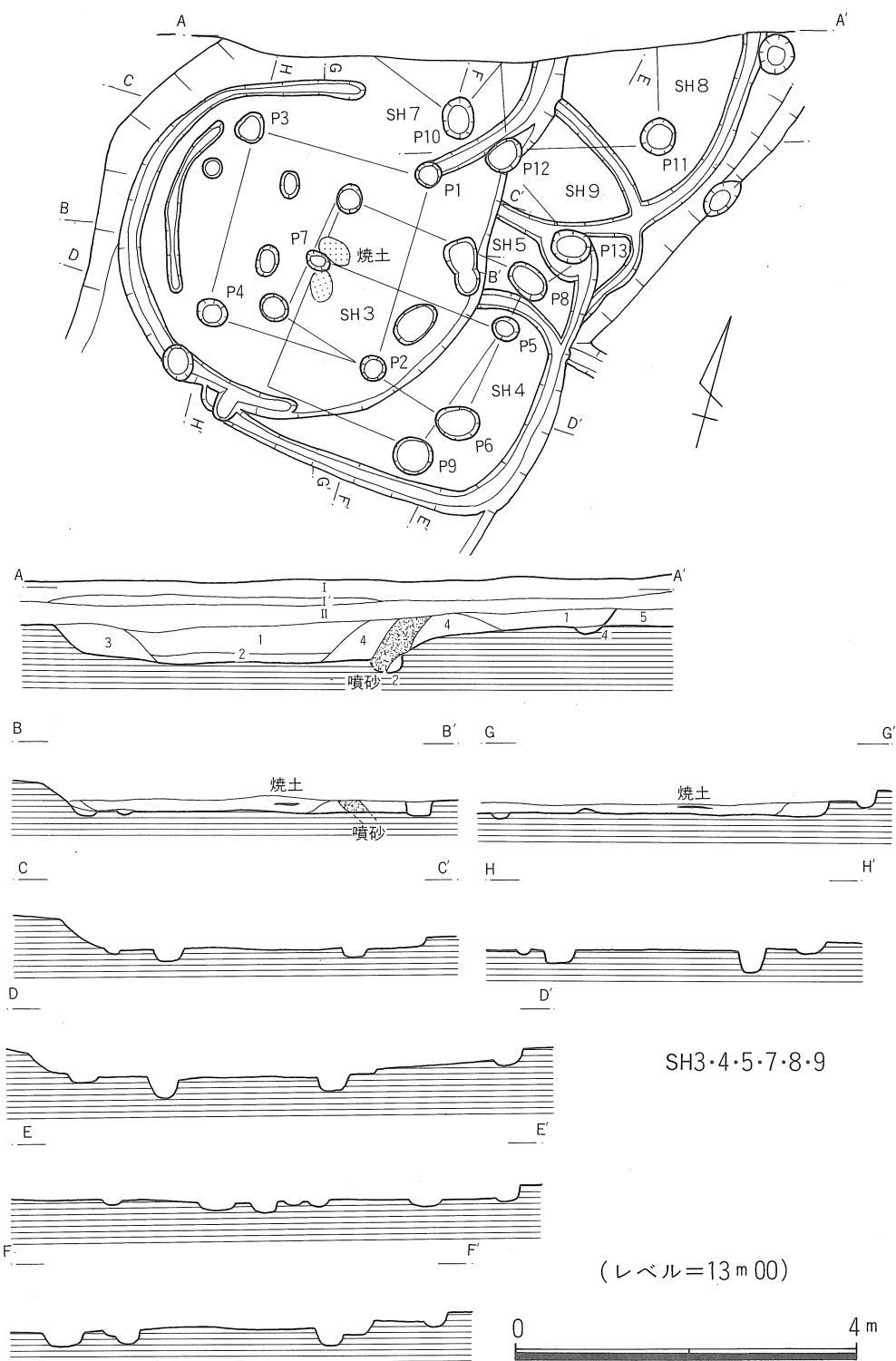
その他の遺構としてはSI1がある。SI1は当初円形周溝墓と考えて調査を進めたが、溝幅も一定でないうえ埋葬主体がありそうな部分の面積が溝の規模の割に少ないことから周溝墓と考えるのは無理がある。性格は不明で時期は後期の遺構としかいえない。



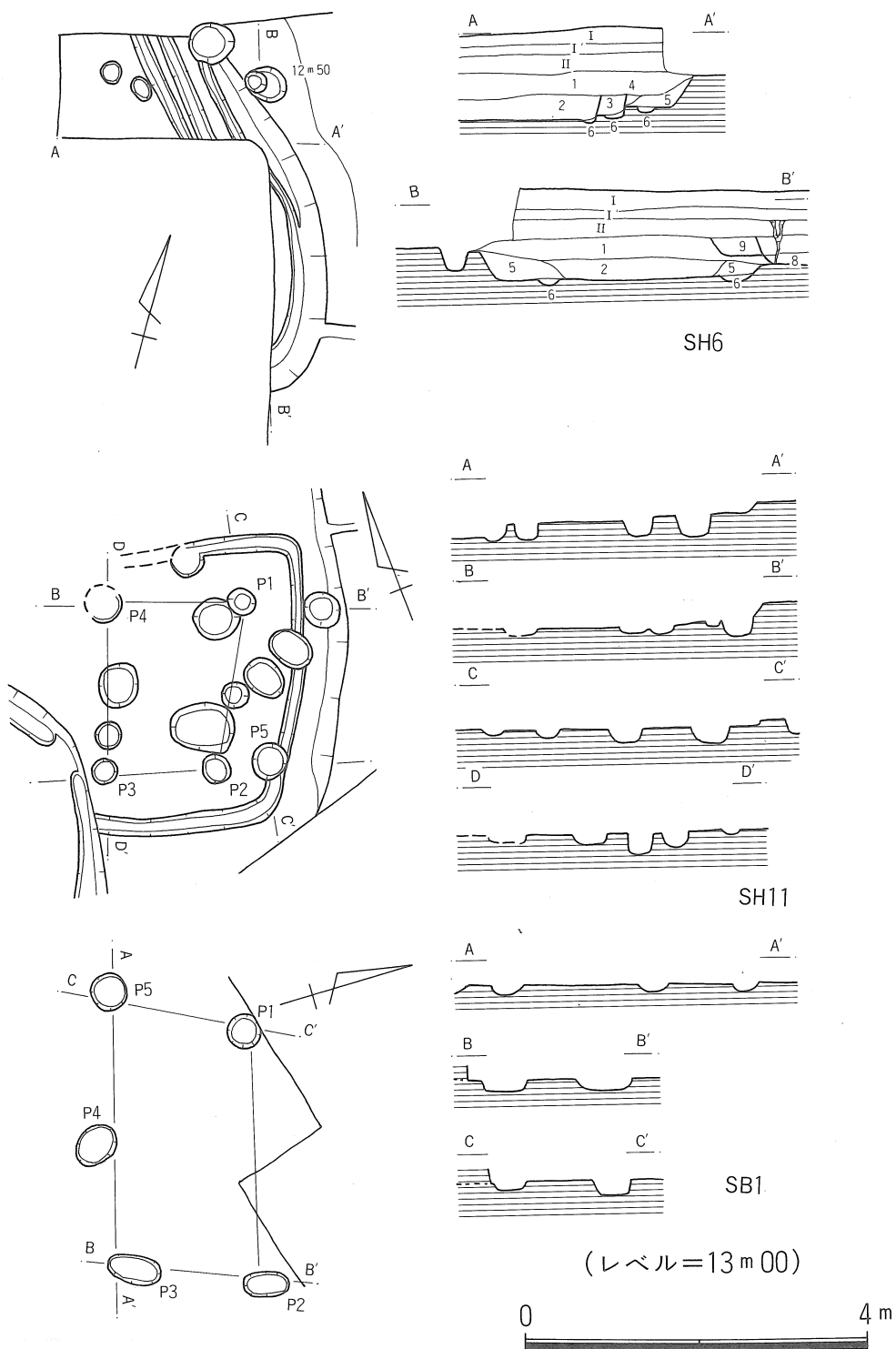
第4図 発掘調査区全体図



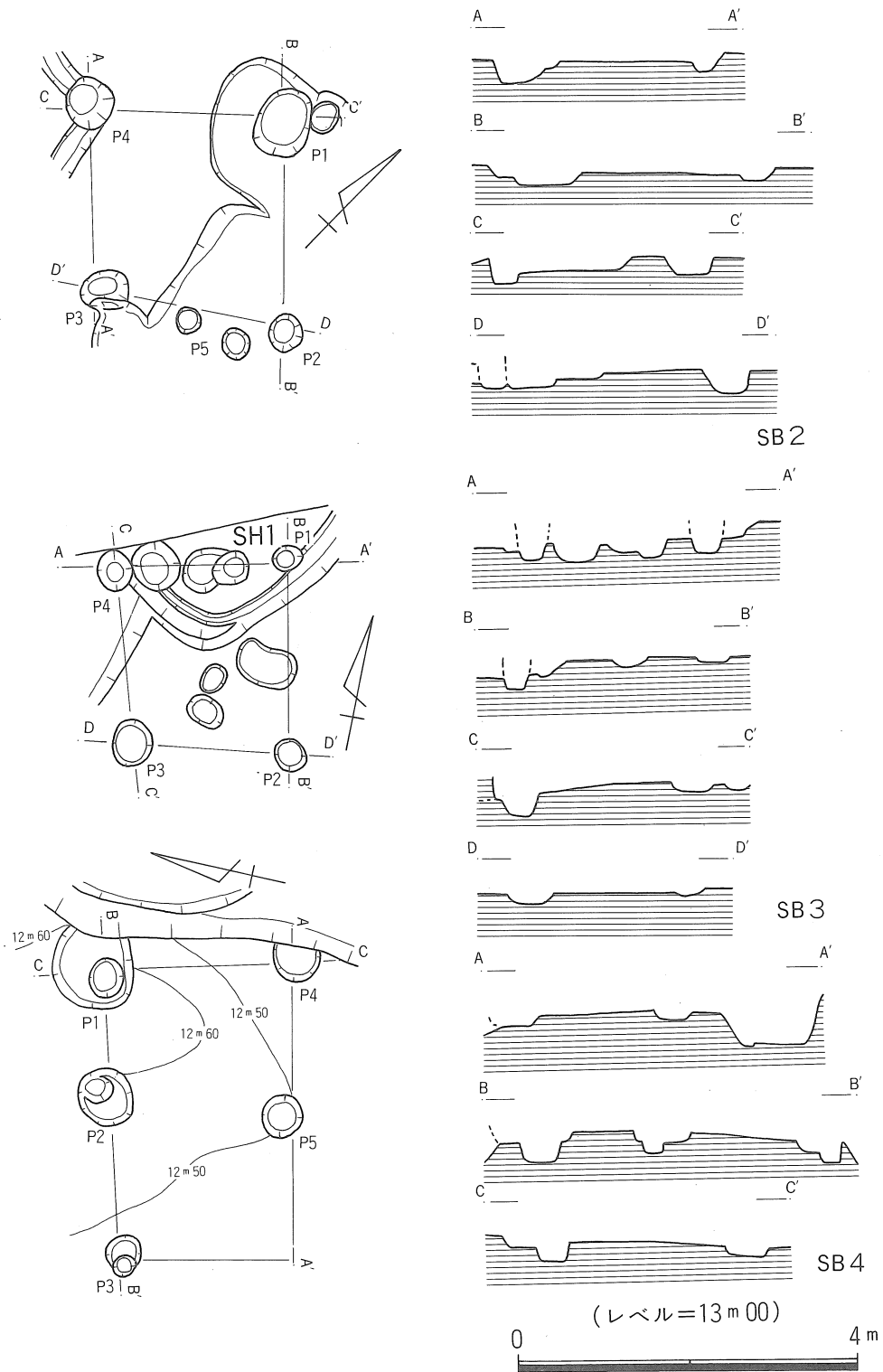
第5図 SH 1・2・10・12実測図



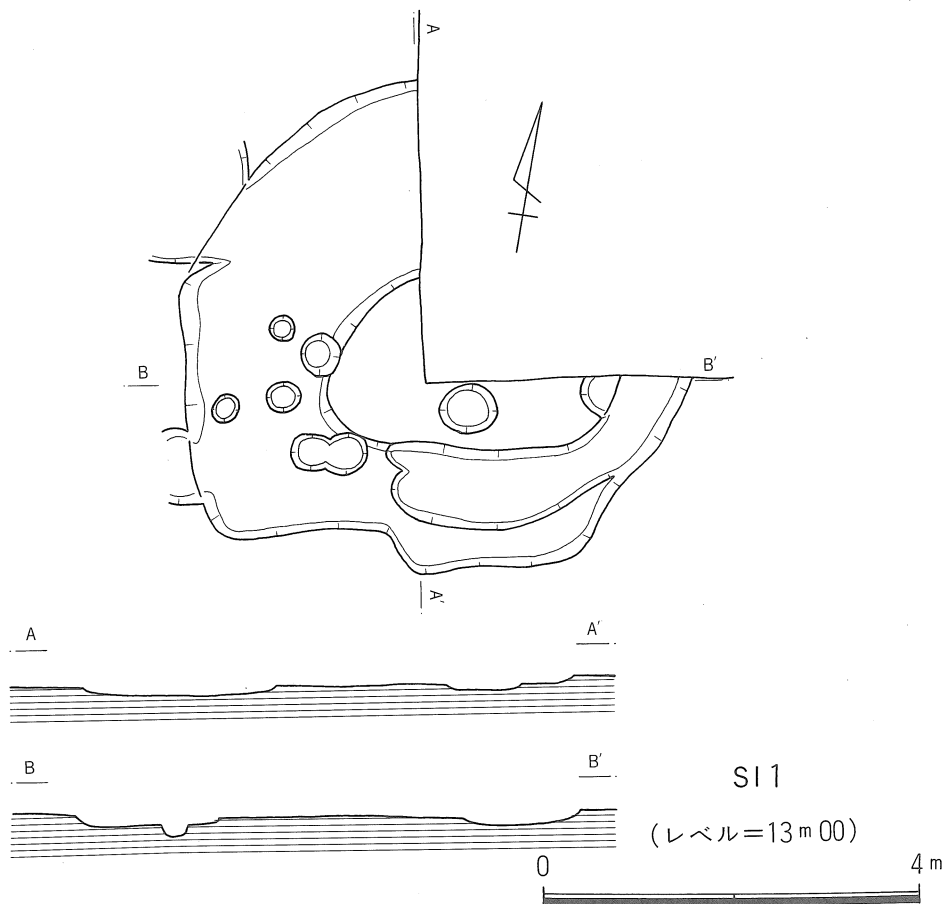
第6図 SH3~5・7~9実測図



第7図 SH6・11、SB1実測図



第 8 図 SB 2 ~ 4 実測図



- | | | |
|-------------------|----------------------|---------------|
| I 灰色粘土(耕作土) | 1 黒色粘土(砂礫混る) | 6 暗灰色粘土(砂礫混り) |
| I 黒色粘土(中世含包層?) | 2 黒褐色粘土(砂礫多量混る) | 7 黒色土(1より暗い) |
| II 黒褐色粘土(弥生時代含包層) | 3 黒褐色粘土(砂礫土ブロック状混る) | 8 黒色土(7より暗い) |
| | 4 褐色砂礫土 | |
| | 5 明黒褐色粘土(砂礫土ブロック状混る) | |

第9図 SI 1 実測図

6 遺物

今回の調査で得られた出土した遺物は、II層より灰釉陶器の小破片が1片出土した以外はIII層の包含層及び遺構出土の遺物はすべて弥生時代中期～後期の土器である。出土量は遺物整理箱5箱分である。

i) 弥生時代中期の遺物(第10図20・21)

弥生時代中期の遺物はSH 3～6の埋土に後期の土器と混じって少量出土している。

20は中期中葉の嶺田式段階の頸部に円形文が施される細頸壺、21は櫛描文を縦に区画しその

下に円形竹管文を施すやや変わったモチーフの中期後葉の白岩式段階の土器と思われるものが出土している。

ii) 弥生時代後期の遺物（第10図1～19、22～32、第11図33～51）

弥生時代後期の遺物は、今回検出できた遺構すべてから出土しているが、小破片が多く表面も摩滅しているものばかりで時期の限定できるものは少なかった。以下器種ごとに説明を加えていく。

壺形土器

単純口縁の細頸壺形土器はおそらく外に開く口縁の壺の11、あまり細頸にならないで外に開く口縁で端部を水平に作る14・15、あまり細頸にならないで内彎傾向の口縁である32などがある。11は後期前半、他については後期後半古段階に属す可能性が高い。

折返口縁の壺形土器は16・28・30・31・46などであるが、小破片で何れも時期の判定が難しいが、比較的折り返し部も小さく後期前半～後期後半古段階に属すると思われる。

単純口縁であるが端部に面を作りそこに棒状貼付文などを施す広口壺の7は後期前半に属すと思われる。

受口口縁の壺形土器は受口部が短く立ち上がる19、やや長くなる1・18、太頸で大形壺の51がある。19は後期後半古段階、ほかは後期前半の段階に属すと考えられる。

壺形土器の肩部文様のうち横刺突文の施された10・44は後期前半、断面三角凸帯文が貼付された29は後期前半、羽状刺突文の施された33は後期後半の古い段階、50は後期後半でも新しい段階に属すると思われる。

高 坏

高坏は単純口縁で端部の作りがシャープな2、端部に面を作る5、坏部と脚部の接合部に断面三角形の貼付文を施す6などは後期前半に属する。口縁端部に小さな断面三角形をなす折り返し口縁をなす22も類例は少ないものの後期前半に属するであろう。

折り返し口縁の高坏については壺形土器との区別がつけられなかったが、内面磨きの17などは高坏と考えられ後期後半の古い段階に属すと考えられる。

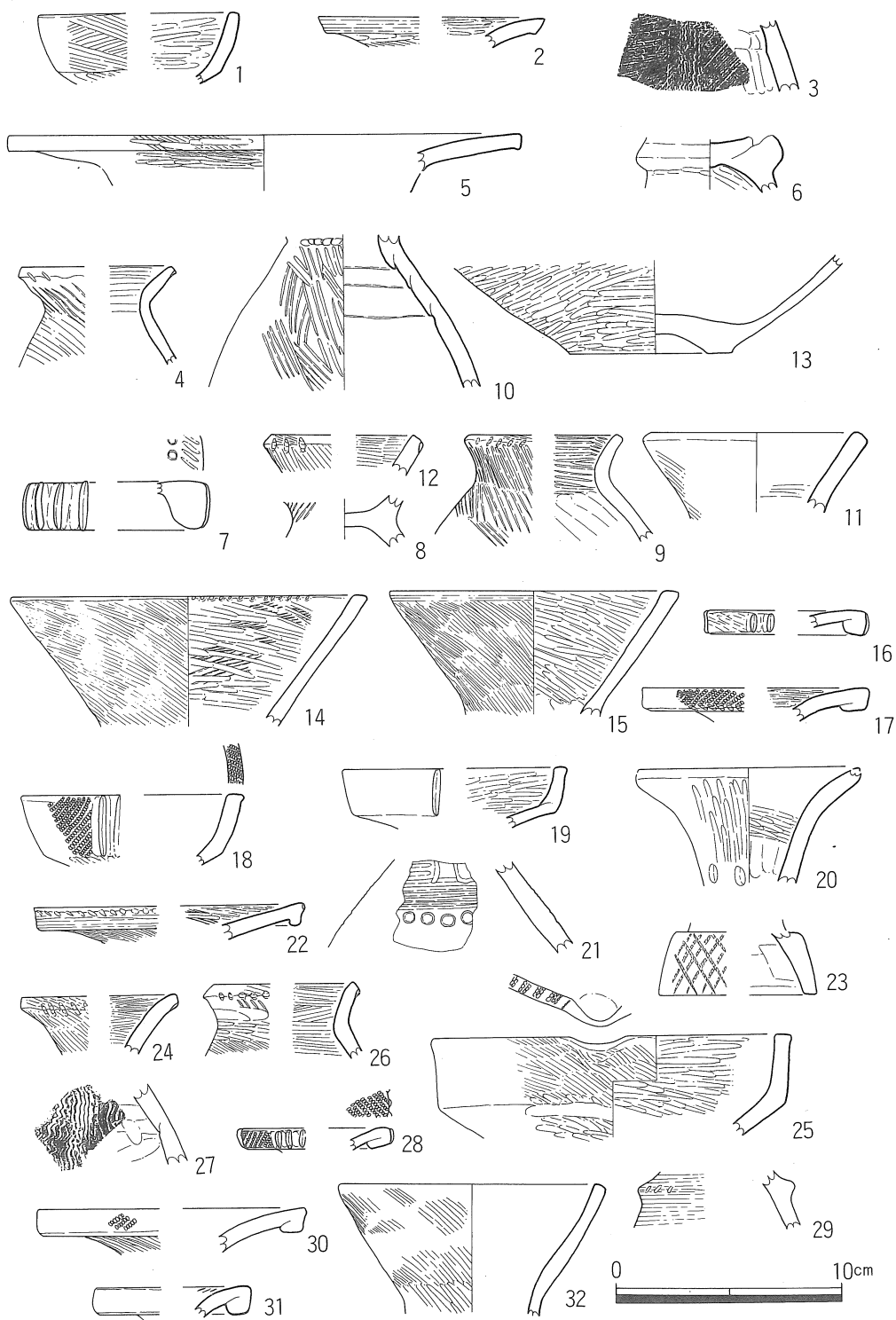
23の高坏脚部は立ち上がりが垂直気味で格子目文を施しており後期後半の古い段階に属すと思われる。

甕形土器

口縁部が緩やかに外反する4・9・40などは後期前半、くの字状になる26・35・37は後期後半古段階に属すと考えられる。ほかのものについては小破片で時期の限定はできなかったが、口縁端部の作りがまだ丁寧な12・24は後期前半～後期後半古段階、端部の面が狭くなり作りが雑になる48は後期後半新段階に属していると考えられる。

鉢形土器

鉢形土器は片口になる25が知られた。端部に刺突文を施し口縁が垂直に立ち上がるなど作りも丁寧で後期前半に属するものと考えられる。

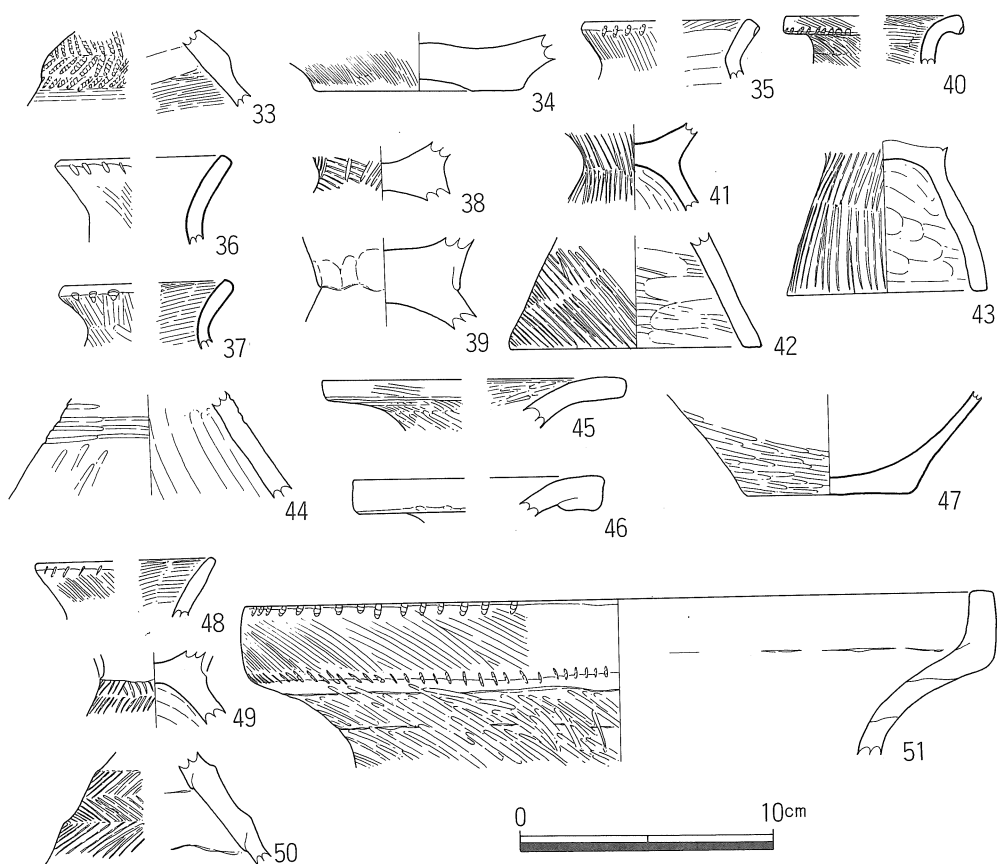


第10図 遺物実測図 1

1~3=SH1 4=SH1P1 5~9=SH2 10=SH2P1 11=SH3P6

12・13・26=SH6 14~23=SH3~6 24=SH3 25=SH3P4 26=SH4P1

27=SH6 28・29=SH12 30~32=SH10・12

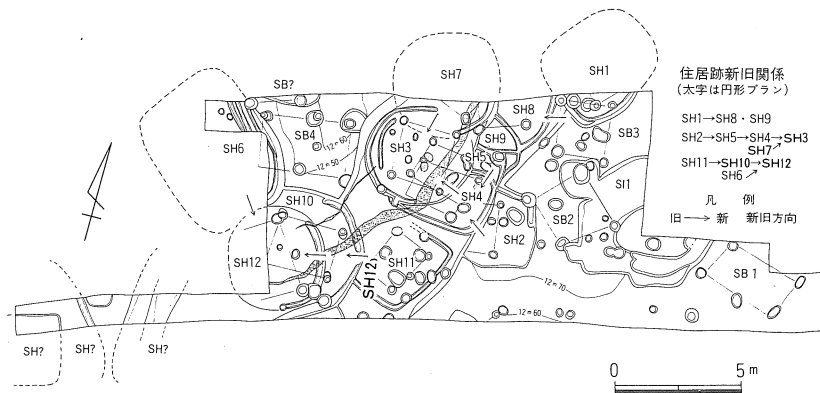


第11図 遺物実測図 2

34 = S H 6 33・38~40 = S H 12 35・42・43 = S H 10・11 36・37・41 = S H 10・12
 44 = S H 11 45~47 = S I 1 49 = S B 2 P 1 48・50・51 = Ⅲ層

7 考 察 —中遠地域における竪穴住居の編年の様相—

第5次調査ではすでに述べたように、当初予想されていたよりも多数の竪穴住居跡を検出することができ、今まで鶴松遺跡の中心域は第1次・第3次調査区と考えられてきたが、今回の調査結果からかなりの広い範囲で後期前半～後期後半古段階には住居跡が営まれたことが判明した。おそらく、第2図に示した加藤芳郎先生により復元された鶴松遺跡の中心部を蛇行して流れる古太田川の支流?の両岸にかなりの住居が点在していたと推定される。しかしながら、現在までの調査結果からは中期中葉～後葉の住居などの遺構が集中するのはやはり第1次・第3次調査区であり、鶴松遺跡の始まりは今のところ遺跡のほぼ中央と考えても良からう。しかし、今回の調査でも流れ込みながら中期中葉～後葉の土器が発見されたことは注目される。少ないながらも、中期中葉～後葉の遺構が鶴松遺跡の全体に広がっていた可能性もでてきたのではあるまいか。この点については今後の調査に委ねたいが、先にも述べたように鶴田Ⅱ遺跡などで出土した中期後葉の土器の位置づけなど鶴松遺跡群における中期の遺構の広がり、かなりの範囲になりそうな可能性もあり、中遠地域の有力遺跡群の動向を知るうえで貴重な資料となるかも知れない。



第12図 住居跡切り合い関係図

本報告書では、今回の調査で多く検出できた竪穴住居のプランについての編年的な位置づけをおこない考察としたい。

鶴松遺跡における竪穴住居のプランの変化について

今回の第5次調査において発見された住居跡の切り合い関係を整理すると第12図のようになる。これを見るとSH8・9の扱いが問題となるが、前述したとおりおむね方形プランから円形プランに変化するようである。出土土器も方形プランの住居からは後期前半、円形プランの住居では後期後半古段階の土器が出土するようである。

いっぽう、第13図に示した第1次調査において発見された住居を検討してみるとSH1・2・4などの長楕円形プランの住居が中期後葉の白岩式段階、SH3・13・14などの長方形プランが後期前半段階の住居らしい。他の住居跡については土器の出土量が少なく時期判定ができていない。

以上の結果から鶴松遺跡では中期後葉の段階では長楕円形プランの住居、後期前半では長方形プランの住居、後期後半古段階では円形プランの住居になることが知られる。この結果から次に中遠地域の住居プランの変化を考えてみよう。

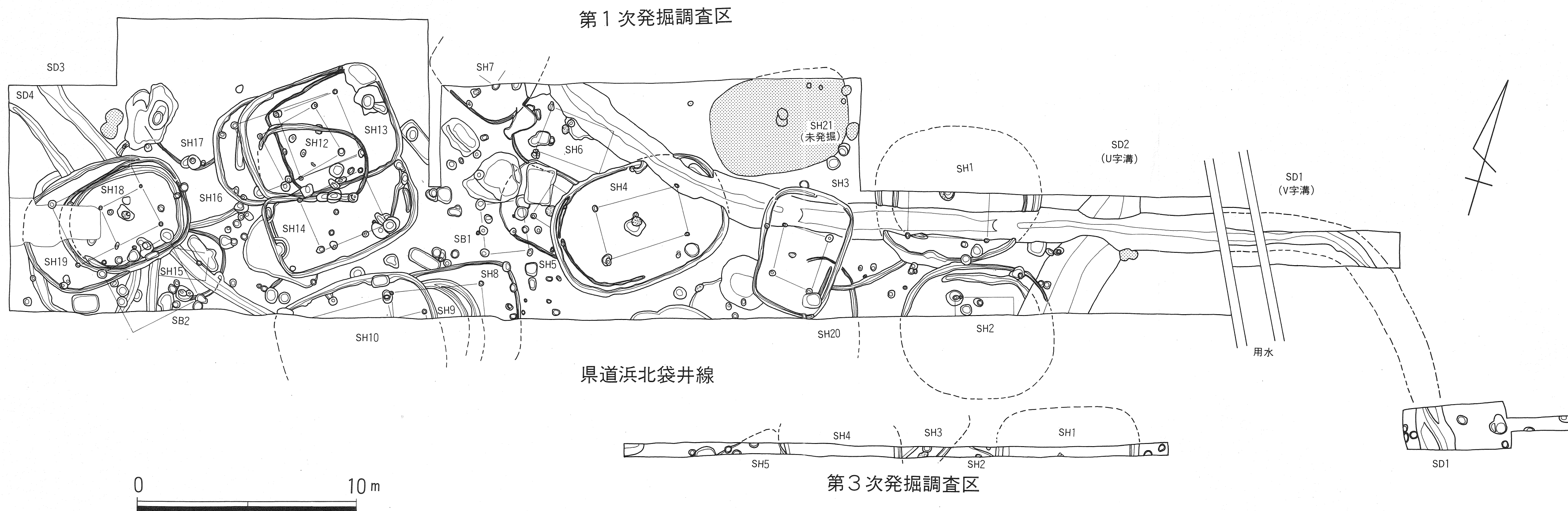
中遠地域の住居プランの変化

中遠地域で弥生時代の住居プランの変化をおえる良好な遺跡として浅羽町北原遺跡がある(浅羽町教育委員会 1987)。古墳時代前期では磐田市城之崎遺跡(磐田市教育委員会 1978)などの資料を使い中遠地域の住居プランの変化を追ってみたい。

中遠地域で弥生時代の最古の住居が発見されているのは大門Ⅰ遺跡である(袋井市教育委員会 1988)。大門Ⅰ遺跡第4次調査1号住居では中期中葉の方形プランの住居が発見され、それは伊勢湾沿岸の円形プラン住居地域とは異なる、東海東部から関東地域までの広い範囲に採用された住居プランであったことはすでに大門Ⅰ遺跡の報告書で検討した。

中期も後葉になると長楕円形プランの住居がもっとも普遍的に見られるようである。

後期前半になると長楕円形プランの住居もやや減少しながら残るが長方形プランの住居が登



第13図 鶴松遺跡第1次・第3次（一部）発掘調査区実測図

場する。今のところこの長方形プランの住居は中期後葉のものは発見されていない。

さらに後期後半になると、長楕円形プランの住居は長軸方向の法量が減少し、円形プランの住居に近くなるものと、今回の調査で明らかになったように完全に円形プランの住居も出現するようである。長方形の住居も四隅が丸くなり隅丸方形に近いプランの住居に変化し、どのプランの住居も一般的に小形化するなかでの型式変化と捉えられようか。ただし、袋井市愛野向山Ⅱ遺跡や掛川市向畑遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991）でみるように、ごく小数であるが長楕円形プランの住居が大形住居として残るようである。ただし、菊川流域では塚本和弘氏の後教示によると円形プランの住居が後期前半にまで遡る可能性があることや、あるいは藤枝市上藪田川の丁遺跡（藤枝市教育委員会 1981）で中期後葉～後期前半になる円形プランの住居が見られることなどから、円形プランの住居については中期後葉の段階で長楕円形プランの住居の小形化したものがすでにあり、中期後半から引き続き存続する住居型式の可能性もある。また、住居の炉の位置の問題であるが、後期前半までは中央にあったものが後期後半になると偏る傾向の住居が増加するようになる。

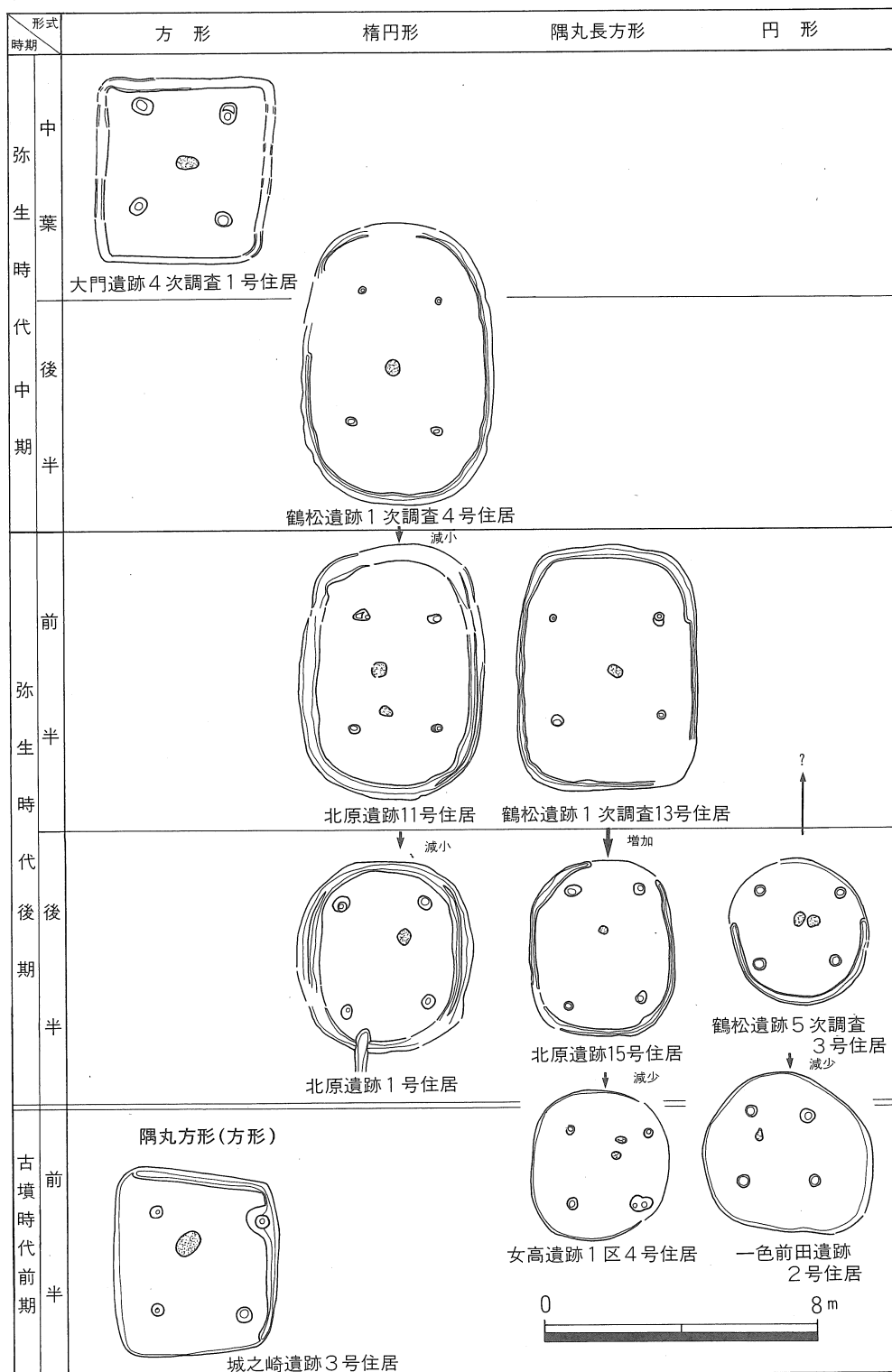
古墳時代前期になると今までの住居型式は一変し、方形に近い隅丸方形住居に統一される。しかし、前期でもごく初頭期の掛川市女高遺跡（掛川市教育委員会 1983）などの状況を見ると楕円形に近い隅丸長方形プランの住居が、袋井市一色前田遺跡（袋井市教育委員会 1981）でも円形プランと見られる住居がまだ残り、確実に変化が完了するのは尾張地方でいうC類S字甕（赤塚 1986）＝布留式古段階の時期であろう。次に地域色を見るために天竜川以西～三河地方までの住居プランの比較を試みてみたい。

天竜川以西～三河地方との対比

天竜川西岸での中期中葉の住居跡は、浜北市芝本遺跡B地点1号住居（浜北市教育委員会 1985）があり、ほぼ方形プランをもつ住居で住居プランは中遠地域と今のところ同一と考えても良い。しかし、どちらの地域も僅か1例にすぎないので、確定的なことをいえる段階ではない。今後の検討課題だろう。

中期後半では例が少ないものの浜松市中平遺跡（浜松市教育委員会 1982）の住居を見ると長楕円形住居があり、中遠地域の動向と似ているが長方形プランの住居も見られる。この点については西三河の知立市天神遺跡（知立市教育委員会 1981）や東三河の豊橋市橋良遺跡（前田 1990）での中期後葉の住居が長方形プランの住居であることから三河地方以西は長方形プランの住居、天竜川以东では長楕円形プランの住居、西遠地域では両者が混在する地域といえようか。長楕円形プランの住居は、横浜市大塚遺跡（横浜市埋蔵文化財調査委員会 1991）や秦野市砂田台遺跡（神奈川県埋蔵文化財センター 1991）の中期後葉（宮の台式段階）の住居をみるとやはり長楕円形あるいは楕円形プランのものが主体であることから、天竜川を境にした大きな住居のプランの地域色があるといえそうである。おそらく凹線文土器を受け入れる地域が方形プラン、受け入れない地域が楕円形プランの住居を採用するという政治的な要素が絡んでいると考えている。

後期前半になると中遠地域でも長方形プランの住居が出現する。これは天竜川以西の長方形



第14図 中遠地域竪穴住居編年図（各報告書から再トレース）

プランの住居を受け入れたためであろう。西遠地域では長方形プランの住居が主体で長楕円形住居はなくなるのにたいし、中遠地域では長楕円形プランの住居が残るようである。後期後半になってもこの傾向は続き中遠地域では楕円形プランの住居はあるが、天竜川以西では隅丸方形プランの住居あるいは古墳時代の住居を髣髴させる方形プランの住居も出現する。また、西遠地域の隅丸方形プランの住居は伊勢湾地域の影響で方形に近いのにたいし、中遠地域の隅丸方形プランの住居は四隅がより丸く造られており楕円プランの住居に近い形状で前段階の影響を強く残す地域色が見られる。

こうした地域色をはらみながらも古墳時代前期2段階（布留式古段階）になると、地域色が失われ方形に近い隅丸方形プランの住居に統一される。しかし、中遠地域では古墳時代前期1段階（庄内式新段階）まで楕円形に近いプランの住居を造り続けるなど、天竜川以東では弥生時代的な社会の体制と風俗などの分野の抵抗があったことが住居のプランを見ても考えられる。この現象は、すでに述べたように古墳時代前期1段階の古式土師器の中には弥生時代後期後半の要素を残した壺形土器型式残存すること（袋井市教育委員会 1990）を考えると、同一の現象と捉えられ興味深いものがある。おそらく、畿内からの政治的影響の強化が図られそれが完成する（＝古墳時代の完全なる成立）のは、天竜川以東の地域において、一般の農民の住居形態や土器の使用方法的統一化という点まで考慮すると、古墳時代前期2段階（布留式古段階）の時期であったことを示唆するものではないだろうか。

以上のように、炉や柱穴の位置など細かな点については考察しなかったが、住居プランだけの検討でもさまざまな地域色がみられ、弥生時代の地域の社会状況を考えるうえできわめて有効な手段であることはここで改めて記述する必要はないだろう。

＜参 考 文 献＞

- 袋井市教育委員会 1982 『鶴松遺跡―日本電信電話公社山科無線中継所建設に伴う緊急発掘調査概報―』
- 袋井市教育委員会 1987 『鶴松遺跡Ⅱ―日本電信電話公社山科無線中継所建設に伴う緊急発掘調査報告書―』
- 袋井市教育委員会 1983 『鶴松遺跡Ⅲ―中部電力株式会社地中配線工事に伴う緊急発掘調査概報―』
- 袋井市教育委員会 1991 『鶴松遺跡Ⅳ―延久地区農村基盤総合整備事業（集落型）施工に伴う鶴松遺跡第4次調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1992 『鶴松遺跡Ⅶ―中部電力株式会社77KV磐田西掛川線一部増強工事に伴う緊急発掘調査報告書―』
- 静岡県教育委員会 1968 「徳光遺跡」『東名高速道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1982 『鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群』

- 袋井市教育委員会 1988 『大門遺跡—袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書—』
- 袋井市教育委員会 1991 『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1991 『袋井市鶴田Ⅱ遺跡』
- 袋井市教育委員会 1990 『若作遺跡・若作古墳群』
- 磐田市教育委員会 1978 『城之崎遺跡発掘調査報告書』
- 浅羽町教育委員会 1986 『北原遺跡』
- 掛川市教育委員会 1983 『行人塚遺跡発掘調査概報』
- 浜北市教育委員会 1985 『浜北市芝本遺跡B地点』
- 浜松市教育委員会 1982 『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』
- 浜松市教育委員会 1982 『中平遺跡』
- 藤枝市教育委員会 1981 『国道1号線バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 第6冊』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 『牛岡遺跡』
- 知立市教育委員会 1981 『知立市西中遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1991 『大塚遺跡』
- 神奈川県埋蔵文化財センター 1991 『砂田台遺跡Ⅱ』
- 赤塚 次郎 1983 「「S字甕」覚書'85」『愛知県埋蔵文化財センター年報 昭和60年度』
- 柴田 稔 1983 「弥生時代の袋井市域」『袋井市史 通史編』
- 寒川 旭 1990 「遺跡の地震研究の成果と展望域」『日本考古学協会第56回総会研究発表要旨』
- 前田 清彦 1990 「三河の村」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』
- 松井 一明 1988 「静岡県における囲郭集落と高地性集落について」『マージナル No.8』
- 松井 一明 1989 「稲作農耕と「村」のはじまり」『浜北市史上巻』

版 圖 真 寫



1. 発掘区全景（西より）



2. SH1（北西より）



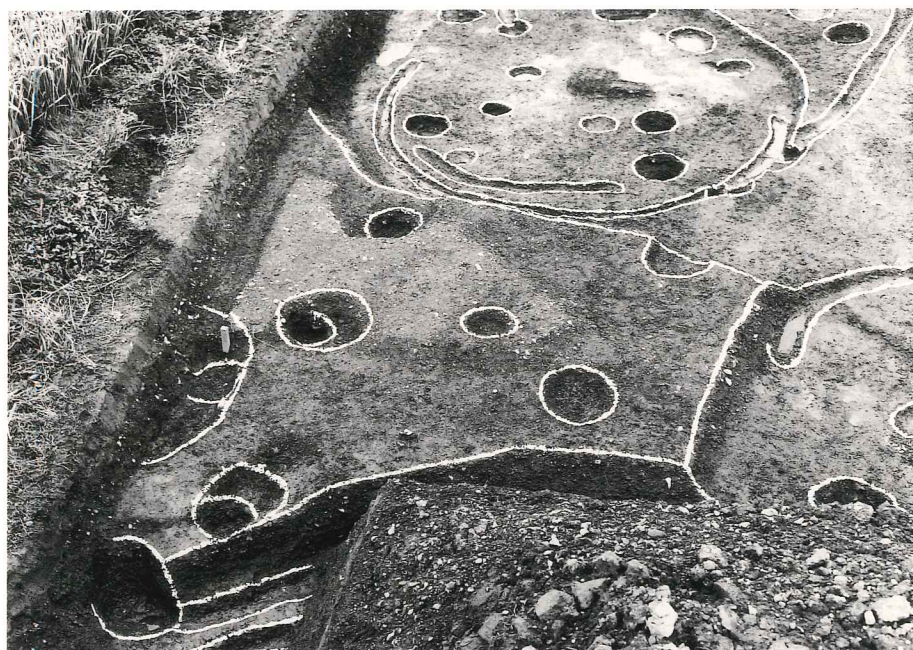
1. SH 2 ~ 8 (重複が多い西より)



2. SH 3 炉跡 (西より)



1. SH10~12 (西より)



2. SB4 (西より)



1. 噴砂検出状況（南より）



2. 出土遺物

鶴 松 遺 跡 V

(株式会社ジュピタ住宅建築
に伴う緊急発掘調査報告書)

1992年 3 月 31日

発 行 静岡県袋井市教育委員会
〒437 袋井市新屋 1—1—1
☎ 0538—43—2111

印 刷 株式会社 開 明 堂
〒430 浜松市中沢町 1—1